

日経ホームビルダー

2008.11

🕒🕒 今月の目玉記事

変わる

現存する 長寿住宅の共通点

ユニットバスに閉じ込められる
顧客に提案できるIT製品

特集

断熱施工の 見えないリスク

施工管理は取り合い部に注意
経験者のホンネから断熱材選び
断熱改修の顧客説明ポイント

探る

瑕疵保険加入 待ったなしに

“ゲリラ豪雨”で思わぬ雨漏り
遮熱塗料の効果を検証

身につける

室内に湿気がこもり 内壁にカビが発生

二世帯改築で親世帯が豹変
「ムク材の床」に顧客の誤解

防湿層のすき間から湿気が入り込み…

断熱で 失敗しない



袋入りグラスウールの正しい施工法は、すべての施工者が熟知しているとは言い難い。室内側のフィルムと室外側のフィルムの違いなどは、あまり分かっていないようだ。当社ではグラスウール断熱施工のマニュアルを用意して、現場の職人に説明の上、記入してもらっている。以前は間柱の見込み面にタッカーを打つ人がほとんどだったが、今は見附け面にきちんと取り付けられている。ただ、**横胴縁の取り付けや筋かいによって、現場ではきれいに納まらないのが悩みだ。**フィルムの切れた個所や損傷した部分のテープ止め、通気層を確保するのはもちろんだが、これからは筋かいをやめて耐力壁面材をメインに使っていこうと思っている。（高橋友也さん、TOMO設計コンサルタント）

温暖地域では一般的なグラスウール10Kタイプである。木造在来工法においてグラスウール充てん工法は、**適切な工事をすれば価格と性能のバランスが取れる材料**だと思う。しかし、仮に防湿シートを破っても補修を徹底するという作業ができるかどうかポイントだろう。できないということを前提とするなら、他の工法や材料を考えなければならない。

（ちはるさん、設計事務所）

一般的な断熱材としては、**コスト面から言っても無難**だと思う。ただし、**筋かいなどがある場合はちょっと入れづらい。**

（リックさん、工務店）

私を書いたコメントです

グラスウール断熱材は、コスト対効果という点では優れた素材だと思う。ただ、繊維状のガラスであるので、**継続的に吸引すると肺ガンなどの危険性が予測される。**通常、グラスウールはビニールなどで覆われた状態で施工するが、柱の間隔が狭い場合や、断熱材が長くて入らない場合は、ビニールの袋を切って施工するので、作業者は吸引の危険に常にさらされる。また、建物の解体時には細かなガラス繊維が周囲に拡散する恐れもある。グラスウール自体は、湿気や水分に対して一度内包してしまうと、排出できないという欠点を持っている。そのためにビニールで覆っているのだが、**ビニールの袋を開けてしまった場合は、壁体内結露によってカビが発生したり、断熱性能が劣化したりして、無力化する。**

（村瀬雄三さん、ホームメイド）

私のコメントに対するメーカーの回答

旭ファイバーグラスからの回答

グラスウールに発がん性の心配はありません。世界保健機関(WHO)の下部機関である国際がん研究機関(IARC)は人に対する発がんリスクの分類において、紅茶・ナイロンなどと共にグラスウールを「ヒト発がん性に分類されない」グループ3に分類しています。ただ、グラスウールも一般の粉じんと同様に異物なので、作業者は防じんマスクなどの保護具を着用するなど、吸引しないような対策を講じることを奨励します。袋入りグラスウールを覆っているフィルムのうち、室内側のフィルムは湿気の浸入を防ぐ防湿層です。壁の場合、柱と間柱あるいは間柱と間柱の間に寸法の合ったグラスウールを充てんして防湿フィルムの耳を重ねた後、見附け面にタッカーなどで留め、施工します。そうすることで防湿層を連続させ、グラスウールへの湿気の浸入を防ぎます。防湿フィルムが損傷した場合はテープで補修します。これで壁体内結露は防止できます。万一、湿気が浸入しても、防湿層以外のフィルムには湿気を逃がすための穴がたくさん開いており、湿気は排出されます。このフィルムは防湿層ではないため、施工上の理由で切ったり、破ったりしても問題は生じません。以上のような正しい施工と共に、壁体内の湿気排出を確実にするため、グラスウールの外側に通気層を確保することもお勧めします。

ダンレーマット (日東紡)



つぶした後の復元力が小さいため、**施工時に押し込むと元に戻りにくい。**窓まわりなどでは施工精度を確保しにくい傾向がある。製品にもよるが、高性能グラスウールの方が全般にコシがあり、緻密な断熱工事がしやすい。

（大澤一実さん、エコハウス）

マットエース MA10 (旭ファイバー グラス)

